

日本ギヤスケル協会

第 33 回大会

2021 年 10 月 9 日 (土) Zoom によるオンライン方式

13:00 開会の辞

日本ギヤスケル協会会長 大野 龍浩 (立正大学教授)

総合司会 桐山 恵子 (同志社大学准教授)

13:05~13:35 研究発表

司会 榎本 洋 (愛知県立大学准教授)

「近く、遠い過去——『克蘭フォード』の時代設定をめぐって」

村上 幸太郎 (宮崎公立大学准教授)

13:35~15:55 シンポジウム「エリザベス・ギヤスケル『シャーロット・ブロンテの生涯』再評価」

『シャーロット・ブロンテの生涯』における読みの可能性」

司会・パネリスト：芦澤 久江 (静岡英和学院大学短期大学部教授)

「文芸批評家としてのギヤスケル」 パネリスト：杉村 藍 (岡山県立大学教授)

「ギヤスケルが描く男たち——ブランウェル・ブロンテの描写を中心に」

パネリスト：瀧川 宏樹 (大阪工業大学特任講師)

「人生のドラマを演出する——*The Life of Charlotte Brontë* における語りの力」

パネリスト：木村 正子 (岐阜県立看護大学准教授)

15:55~16:05 break

16:05~16:30 総会

16:30~16:40 break

16:40~17:40 講演

司会：関田 朋子 (日本大学教授)

「Jane Austen 作品に見る “a fallen woman”

——Peter Jenkins の悪戯を手掛かりに」

久守 和子 (フェリス女学院大学名誉教授)

17:40~17:45 閉会の辞

日本ギヤスケル協会副会長 松岡 光治 (名古屋大学教授)

本大会に関する問い合わせ：日本ギヤスケル協会事務局

〒422-8545 静岡県静岡市駿河区池田 1769 静岡英和学院大学短期大学部 芦澤久江研究室

E-mail : ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp

梗概

研究発表

「近く、遠い過去——『克蘭フォード』の時代設定をめぐって」

村上幸太郎（宮崎公立大学准教授）

『克蘭フォード』（1851-53）は、押し寄せる時代の変化を暗示する点はあるにせよ、基本的には伝統的価値観に基づいた田舎町の平穏な日常を描き、当時の読者の郷愁を刺激する作品であることは間違いない。作品の結びにおいて、語り手は克蘭フォードが今もなお昔のままの場所であることを現在形で報告して、作内の世界観の存続を示すことで読者を安堵させている。

『克蘭フォード』はディケンズやテニソンの作品への言及や王室に関する話題から察するに、1830年代後半から40年代前半を主な舞台としている。この時代の情景をリアルタイムで描写したスケッチ作品では、田舎の風景は消えゆくもの、あるいはすでに失われたものとして懐古的に描かれることが多い。そのため、あたかも古き良きイングランドがまだ残っているかのように描く『克蘭フォード』の結末はいささか楽観的にも見える。本発表では、執筆時と作品世界の間の時間の隔たりに着目し、『克蘭フォード』におけるギヤスケルの「近い過去」の扱いについて考えてみたい。

シンポジウム

「エリザベス・ギヤスケル『シャーロット・ブロンテの生涯』再評価」

エリザベス・ギヤスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』はブロンテ神話を作り出すほど、今日まで多大な影響を与えている。しかし現代においては、ギヤスケルの手紙の扱い方、日付の改ざんなど、さまざまな問題をこのテキストが包含していることが明らかになっている。それでもギヤスケルの伝記を凌ぐシャーロット・ブロンテの伝記はこれまでにない。そこでさまざまな観点から、ギヤスケルの伝記を再評価してみたい。

『シャーロット・ブロンテの生涯』における読みの可能性

芦澤久江（静岡英和学院大学短期大学部教授）

ギヤスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』はそれまで知られていなかったシャーロット・ブロンテの女性らしい側面に光を当てることで、ヴィクトリア朝時代の読者から共感を得ることができた。それはまさにギヤスケルの戦略どおりであった。しかしギヤスケルはシャーロットの家庭的な側面だけを描いていたわけではなく、作家としての人生も描いている。すなわち当時の女性の義務と女性作家という二つの側面、言い換えれば現代にも通じるジェンダーの問題を扱っている。ところがそうした問題を提起しながらも、ギヤスケルはその問題に対して明確な答えを示していない。その相反する生き方はシャーロットの死という結末によって、一見統一されたかのように見えるが、何も解決はしていない。ところがその曖昧な宙づり状態こそ、この伝記が現代において不動の地位を占めている所以だと思われる。つまり読みの可能性がそこには生まれているのである。そこでギヤスケルの伝記がヴィクトリア朝時代から今日に至るまでどのように読まれてきたかを概観しながら、現代におけるギヤスケルの伝記の再評価を行いたい。

「文芸批評家としてのギヤスケル」

杉村藍（岡山県立大学教授）

ギヤスケルはブロンテがいかに気高く誠実で優しい女性であったかを示そうとして『シャーロット・ブロンテの生涯』を執筆したと述べている。その結果、ヴィクトリア朝の女性観にかなったブロンテ像が生み出された。しかし、ブロンテは当時の価値基準に合致した女性として「創造」される一方で、人気作家でもあった。詩人・小説家としてのブロンテの側面を、ギヤスケルはこの伝記の中でどのように表現しているのだろうか。そこには伝記作者としてのギヤスケルだけでなく、文芸批評家としての彼女の姿も垣間見ることができるのではないだろうか。ギヤスケルが直接ブロンテ作品を批評している記述は少ない。しかし、当時発表されたブロンテ作品のどの書評、またブロンテのどの手紙や初期作品、エッセイを伝記の中で取り上げるかという選択に、ギヤスケルの文芸批評家としての一面が反映されていると言える。これらを手がかりに、小論では『シャーロット・ブロンテの生涯』を通して文芸批評家としてのギヤスケルについて考える。

「ギaskellが描く男たち——ブランウェル・ブロンテの描写を中心に」

瀧川宏樹（大阪工業大学特任講師）

女性作家であり、女性を主人公として女性の生き様を描くギaskell作品の研究において、フェミニズムの観点からの批評が多いのは当然のことであろう。昨今はマスキュリティの研究が多方面でなされており、ギaskell研究においても2020年にMeghan Loweによる研究書（*Masculinity in the Work of Elizabeth Gaskell*）が出版された。しかし、Loweの前掲書において『シャーロット・ブロンテの生涯』は取り上げられていない。女性（ギaskell）による女性（ブロンテ）の伝記の中で、男性たちはいかにして描写されたのであろうか。本作における男性に関しては、パトリック・ブロンテ、ウィリアム・キャリス・ウィルソン、ブランウェル・ブロンテなど、主に事実と異なる描写という問題点が指摘されてきた。本発表では、特にブランウェル・ブロンテの描写を中心として、事実と異なるかどうかという観点からではなく、本作品の男性表象に着目し、ギaskellの男性観に迫りたい。

「人生のドラマを演出する——*The Life of Charlotte Brontë*における語りの方」

木村正子（岐阜県立看護大学准教授）

ギaskellはシャーロット・ブロンテの伝記を執筆するにあたり、作家の人生と作品の登場人物の人生を同一視する文壇や読者への反論として、家庭の義務を第一とするブロンテ像を前景化した。そして、ブロンテ作品批判の対象である“coarseness”は、ハワースの土地柄や人間関係がもたらす過酷な状況が投影された結果であることを強調したが、逆にこれがブロンテの周囲の人々への批判に繋がり、一部の記述は名誉棄損の告発を受けて修正版に差し替えるという事態を招いた。この点に関しては、情報管理に関するギaskellの認識の甘さが何度も指摘されてきたが、後のギaskell作品を見ると、それで収束をはかるのは早計だと思われる。1861年の「灰色の女」では、登場人物の人生を語る際、虚構と真実の区別が重要なのはその関係者が生きている間のみ、という時限装置が仕掛けられており、今日われわれがこの伝記を読む場合、問題の第一版を手にするのは、本書がブロンテの人生の記録にとどまらず、ギaskellが紡ぎ出す語りを楽しむ「物語」であるからであろう。本発表では、ギaskellによる他者の人生の演出はむしろ戦略的であるという観点から論じたい。

講演

「Jane Austen 作品に見る “a fallen woman”

——Peter Jenkyns の悪戯を手掛かりに」

久守和子（フェリス女学院大学名誉教授）

Cranford (1851-53) に登場する少年 Peter は悪戯好き。姉の衣裳を纏い、町の人々に見える庭先で姉があたかも非嫡出子を産んだかのように、布で包んだ枕の「赤子」をあやし、父親の怒りを買う。H. Thomson、C. E. Brock、J. Hassall の挿絵付き *Cranford* がそれぞれ 1891 年、1904 年、1940 年に出版されるが、Peter のこの悪戯を描くのは Hassall のみである。“a fallen woman”の絡む場面描写を避けたに違いない。

Jane Austen が 14 歳の頃、家族向けに書いた “Love and Freindship [sic]”に、老貴族と孫 4 人（非嫡出の娘 4 人それぞれの子）が偶然一堂に会する場面があるが、ここに “a fallen woman”や “natural daughters/sons”などの陰りはない。もっともその後 *Sense and Sensibility* (1811) に描かれる Eliza や、*Mansfield Park* (1814) の Maria Rushworth となると話は別である。Gaskell の Ruth Hilton とも異なる、Austen の “a fallen woman”の描き方を考えてみたい。